

「錯覚からの議論」と選言説

横山 幹子*

The Argument from Illusion and Disjunctivism

Mikiko YOKOYAMA

抄録

我々の経験は心から独立した対象についてのものであり、我々はそれらの対象に直接気づくことができるという考えは、自然である。しかし、多くの哲学者が、知覚的誤りの可能性のために、素朴实在論に反対してきた。「錯覚からの議論」もそのような議論の一つである。「錯覚からの議論」によれば、素朴实在論は錯覚の可能性と矛盾し、それゆえ、偽なのである。しかし、「錯覚からの議論」に反対する哲学者もいる。Fishもその一人である。彼は、選言説（知覚についての現代の議論における主要な考えの一つ）を採用し、素朴实在論は錯覚の可能性と矛盾しないと主張している。本論文では、選言説の立場で「錯覚からの議論」に答えることが不適切ではないと主張するために、Fishの議論の妥当性を検討する。そのためにまず、本論文で考える素朴实在論はどのような考えかの説明から始める。次に、「錯覚からの議論」がどのようなものなのかを整理する。それから、Fishによる選言説の立場からの「錯覚からの議論」への返答と、「錯覚からの議論」への別の返答（Smithの考え）を概観する。そして最後に、選言説の立場で「錯覚からの議論」に答えることが不適切ではないと論じる。

Abstract

The idea that our experiences are of mind independent objects and we can be directly aware of those objects is natural. But many philosophers have been arguing against naïve realism because of the possibility of perceptual errors. 'The argument from illusion' is one of those arguments. According to 'the argument from illusion', naïve realism is incompatible with the possibility of illusion and it is therefore false. Yet, there are some philosophers against 'the argument from illusion'. Fish is one of them. He adopts disjunctivism (one of the main views in the current debate about perception) and claims that naïve realism is compatible with the possibility of illusion. This article examines whether Fish's argument is reasonable in order to claim that the response to 'the argument from illusion' embodied in disjunctivism is not unreasonable. To that end, I will start with an account of the conception of naïve realism here. Next, I will organize 'the argument from illusion'. Then, I will review Fish's response to 'the argument from illusion' embodied in disjunctivism and another response to 'the argument from illusion' (Smith's idea). Finally, I will argue that the response to 'the argument from illusion' embodied in disjunctivism is not unreasonable.

* 筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science,
University of Tsukuba

1. はじめに

今、ある人が目の前の本を見ていると言うとき、通常の場合、本を見ているというその人の経験は、その人の心から独立した外的世界の対象である本についてのものであると考えるのが普通である。このように、「我々の知覚的経験は、我々の心から独立した対象についてのものであり、たとえ例外的に知覚的誤りがあるとしても、大抵の場合、我々の心とは独立に存在する外的世界の対象（物理的対象）に、我々は知覚的に直接気づく¹ことができる」と考える立場は、素朴实在論と呼ばれる。その考えは日常生活において多くの人が自然に受け入れている考えである。しかし、哲学においては、素朴实在論は間違いであると論じられることが多い。その議論の中でも代表的なものは、Ayer²が整理して提示したと言われる「錯覚からの議論」である。「錯覚からの議論」とは、幻覚や錯覚のような知覚的誤りを認め、それらの場合に何らかの内的なものが知覚の対象になっていると認めるなら、真正な知覚の場合の知覚の対象も、我々の心とは独立に存在する外的世界の対象ではなくなるので、知覚的誤りを認める一方で、真正な知覚の場合には我々の心とは独立に存在する外的世界の対象に知覚的に直接気づくことができるとする素朴实在論は間違いであるとするものである。しかし、その議論を認めて、幻覚や錯覚も含めた広い意味での知覚の対象が、外的世界の対象ではなく、たとえば、センスデータのような内的なものであるとし、間接实在論をとるなら、我々は外的世界の対象についての本当のことは何も知ることができないということになる。もちろん、ここで、外的世界の対象を考えず、全てが我々の心の中にある内的なものであると考えるなら問題を避けることはできる。けれども、もしそれを望まず、我々の心とは独立に存在する外的世界の対象を認めたとえ、外的世界の対象について知ることができると考えたいなら、素朴实在論を擁護しなければならぬ。本論文では、知覚的誤りの中でも特に錯覚に焦点を当て、素朴实在論に対する代表的な批判である「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護する方策について考えたい。

素朴实在論に反対する「錯覚からの議論」については、Ayer以来様々に論じられている。しかし、ここではそれらを全て扱うことはできない。ここでの目的は、Hinton³によって明確に提示されたと言われ、近年様々に議論されている知覚の選言説（経験を心から独立した対象についてのものだと考え、真正な知覚と幻覚や錯覚

が共有する共通の要素（センスデータ等）を認めず、知覚的誤りを選言によって説明しようとする立場）をとることにより「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護しようとする方策について検討することにある。具体的には、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護しているFishの考えが、選言説以外の立場から「錯覚からの議論」に答えようとしているSmithが自分以外の方策に対して提出している批判に答えることができるのか、Smithが「錯覚からの議論」に答えるために必要だとしている要件をFishの考えがどの程度満たすことができるのかの考察を通して、選言説による素朴实在論擁護が不適切なものでないことを示したい。

そのために、まず、私は、本論文で擁護したい素朴实在論がどのようなものであり、FishやSmithの考える素朴实在論や直接实在論とどのような関係にあるのかを説明する。なぜなら、本論文の目的は、FishやSmithの「錯覚からの議論」に対する反論を検討することによって、「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護する方策としての選言説が不適切なものではないと示すことであるので、実際にFishやSmithが行っている作業が、本論文での素朴实在論擁護と関係しているということを確認しておく必要があるからである。次に、FishやSmithによる定式化を参考に、「錯覚からの議論」がどのようなものであるかを確認する。それから、Fishによる選言説の立場からの「錯覚からの議論」への返答⁴、Smithによる「錯覚からの議論」への返答⁵をまとめる。そして、最後に、Fishの考えとSmithの考えを考察することによって、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護することが不適切なものではないということを論じる⁶。

2. 素朴实在論

本章では、本論文で擁護したい素朴实在論がどのようなものであり、それはFishやSmithの考える素朴实在論や直接实在論とどのような関係にあるのかを説明する。

本論文で擁護したい素朴实在論は、第一章で見たように、「我々の知覚的経験は、我々の心から独立した対象についてのものであり、たとえ例外的に知覚的誤りがあるとしても、大抵の場合、我々の心とは独立に存在する外的世界の対象（物理的対象）に、我々は知覚的に直接気づくことができる」と考える立場である。このような考えは、哲学において、素朴实在論と言われたり、直接实在論と言われたりする⁷。

Fishは、「真正な視覚的経験の現前的 (presentational)

特徴は、主体が見ている物理的世界の要素によって構成されており、この経験の現象的特徴は、主体にこの現前的特徴を直知させるというその性質である⁸と考えるのが、素朴实在論であるとする。彼によれば、現象的特徴とは、「ある経験を持つとはどのようなことかによってその経験をタイプ付けるその経験の性質⁹」であり、現前的特徴とは、「ある経験を持つ際に主体に提示される、そして、それによって、その経験を持つことがどのようなことかということの特徴付けている性質の(ことによると、対象の)集まり¹⁰」である。

Smithによれば、素朴实在論は、「知覚の際、我々は常に世界が正確にそうであるように知覚しているという見解¹¹」を表すことがあるが、それは信じがたい。彼はそのような考えと区別して直接实在論という考えを示している。彼の言う直接实在論とは、物理的世界は認識されることに依存しない存在を持ち、我々はそれに直接気づくことができるという主張である。

上記のSmithの直接实在論が、本論文で擁護したい素朴实在論である。一方、Fishによれば、心から独立した世界の特徴によって構成されている現前的特徴を直知しているから、我々は、心から独立した世界について知覚によって知りうるのであり、知覚の対象は、その経験的状況の構成要素である。このような素朴实在論の考え方は、本論文で擁護したい素朴实在論の内容を含み、なおかつ、それ以上のことを主張するものである。

以上のように見てくるならば、Fishの素朴实在論は本論文での素朴实在論を含むものであるので、Fishの議論が彼の言う素朴实在論を「錯覚からの議論」から擁護できるなら、本論文での素朴实在論も「錯覚からの議論」から擁護できる。また、Smithの直接实在論は本論文の素朴实在論に相当するので、彼の言う直接实在論を「錯覚からの議論」から擁護できる場合も、本論文での素朴实在論を「錯覚からの議論」から擁護できる。

3. 「錯覚からの議論」

本章ではFishやSmithが「錯覚からの議論」をどのようなものと考えているかを確認する。

Fishによれば、素朴实在論の偽を主張する際に注目されるのは、知覚的誤りであり、錯覚もその中の一つである。しかし、存在しないものを見ているように思う経験である幻覚とは違って、錯覚とは、「知覚された対象が、・・・それが例示していない性質を所有しているように思える状況¹²」のことである。彼はSnowdon¹³に倣い、その議論を、素朴实在論が錯覚の場合に偽であるこ

とを示す「土台」の部分と、素朴实在論が真正なものを含むすべての場合に偽であることを示す「拡張部分」に分ける。土台の部分の議論の第一の前提は、知覚的錯覚が可能であるということであり、第二の前提は、「主体にある対象がある性質を持っているように(視覚的に)思えるとき、その性質(錯覚的性質と呼ばれる)は、錯覚的経験の現前的特徴として現れるというもの¹⁴」である。しかし、その二つの前提を認めると、錯覚の場合、素朴实在論は偽であることになる。なぜなら、素朴实在論によれば、現前的特徴として現れる性質は、主体がその性質を直知しているから、現前的特徴として現れていることを認めなければならない、その性質を例示しているものはその対象であるように思われるが、第一と第二の前提を認めるなら、知覚的錯覚は対象によって例示されない性質を持っていることになり、両者の考えは矛盾するからである。そして、錯覚の場合素朴实在論は偽であるというこの考えは、真正な知覚的経験と錯覚的知覚的経験の経験的連続性のために、真正な知覚を含むすべての場合に拡張される。異なる視点からは同じものでも様々な形をとって見えるので、錯覚の場合と錯覚でない場合の違いは程度の問題だというのである。

一方、Smithによれば、「錯覚からの議論」は、常識が認める二つのテーゼ、我々が物理的世界に直接気づいているというテーゼと、錯覚は可能であるというテーゼが矛盾しており、後者のテーゼは議論の余地がないので、前者のテーゼが否定されなければならないと主張するものである。彼によれば、その議論は以下のように進む。

第一の段階は、知覚的錯覚が生じうるという前提である。ここでの錯覚というのは、Smithによれば、「物理的対象が現実知覚されるが、何らかの理由でその対象が現実にそうであるのとは異なって知覚的に現れるような任意の知覚的状況に適用されるもの¹⁵」のことである。視覚だけでなく、触覚や聴覚等全ての感覚が錯覚しうる。

第二の段階は、知覚的錯覚が生じうるという前提から推論されるものであり、「何らかのものが、それが現実には持っていない特徴を持っているように知覚的に現れるときはいつでも、我々は、現実にその特徴を持っている何らかのものに気づいているという前提¹⁶」がそれである。これは、気づきの直接の対象として、現実にその特徴を持っているもの、センサーデータを導入する。それゆえ、その推論は、センサーデータの推論と言われる。

第三の段階は、「錯覚の状況では、現れている物理的対象は、以前の段階にしたがえば、我々が直接気づいている特徴を持っていないので、そのような状況で我々が

気づいているのは物理的対象ではない」¹⁷とするものである。白い壁が黄色に見える場合、我々が直接気づいているものは黄色であり、白ではないので、我々が直接気づいているのはその壁ではないというのである。

そして、その議論の最終段階は、「真正な知覚的状况や錯覚的状况をも含めたすべての知覚的状况において、我々は、直接はセンスデータに気づいているのであり、せいぜい間接的に普通の物理的対象に気づいているだけである」¹⁸とする一般化の段階、先の言葉で言えば、拡張段階である。彼によれば、第三の段階までが受け入れられるなら、この最終段階を否定することはできない。なぜなら、一般化の段階を否定することは、たとえば、お店の人工的な光のもとで洋服を見て、それから外に出て日の光のもとで本当の色を見るという場合、外に出ることによって急に、それまで気づいていなかった物理的対象に直接気づくと考えることであるが、それはおかしいと考えられるからである。真正な知覚と同じものに気づいているというのが、錯覚の本質なのである。これは、Fishの言い方を借りるなら、真正な知覚と錯覚は連続しているので、錯覚に関して素朴实在論の偽が主張されるなら、真正な知覚についても素朴实在論の偽が主張されることを示している。

以上のように、Fishの「錯覚からの議論」の捉え方も、Smithの「錯覚からの議論」の捉え方も、基本的には同じことを言っている。つまり、錯覚が可能であることを認めるなら、錯覚的経験が現実には持っていない特徴を持っており、我々はそれに気づいてなければならないが、錯覚的経験の場合それは物理的対象ではなく、たとえば、センスデータであるので、素朴实在論は錯覚の場合に偽であり、真正な知覚と錯覚が連続しているので、錯覚の場合の偽は、真正な知覚の場合も広げられるのである。

4. 「錯覚からの議論」に対するFishの素朴实在論擁護

4.1 選言説

Fishによれば、知覚的誤りからの議論による素朴实在論への攻撃に対し、真正な知覚の場合には素朴实在論が擁護されると主張する一つの考えが、選言説である。それは、「私はF（ここでは、知覚の対象を示す変項）を見ているように見える（seem）」という陳述を「私がFを見ているか、そうであるかのように私に見える（seem）かのどちらかである」という選言の短縮形として扱おうとするので、選言説と呼ばれる。そして、幻覚（知覚的

誤りの一つである）からの議論に対する選言説の返答は、真正な知覚的経験と幻覚的経験を異なる種類のものであると考え、両者に共通な心的状態を要求することなく両者を説明することによって、幻覚の場合に素朴实在論が偽であるからといってその偽を真正な知覚に拡張することはできないと論じることである。彼はこの選言説をとり、真正な知覚的経験の、特に真正な視覚的経験の現象的特徴を、環境の区域にある事実を主体に知らせるものだとし、「経験が主体に関係させる事実の特定の配置は、したがって、経験自体の現象的特徴は、環境にある対象と性質の分布、その環境における主体の場所や視点、視覚一般の本質と主体の視覚体系の特異性、主体の注意力の現在の分布、主体の概念的力によって決定される」¹⁹とする。彼によれば、概念的力、概念把握能力とは、事実を知覚する能力である。そして、彼は、Kirkに倣い²⁰、それを、維持され増加する情報に基づいて自分の行動の着手や制御ができ、環境についての情報を入力・維持でき、情報を解釈でき、その状況に接近でき、維持され増加する情報に基づいていくつかの行為から行為を選択でき、目的を持つことができるということであるとするのである。一方、幻覚的経験の特徴に関しては、彼は、「(1) 幻覚は、関係する種類の真正な知覚によって生み出された判断もしくは信念を生み出すことに失敗してはならない。(2) 幻覚は、関係する種類の真正な知覚によって生み出されなかった信念や判断を生み出してはならない」²¹と言っている。

けれども、Fishによれば、錯覚の場合を幻覚の場合と同じように扱うことはできない。錯覚的経験を選言のどちらか片方の場所に置かれるべきだと考えるならば、それが真正な知覚的経験の側に置かれるか、幻覚的経験の側に置かれるかが問題になる。しかし、錯覚の場合、間違っただけで知覚されているのは対象のある性質（たとえば色）だけであり、その対象のほかの性質（たとえば形）を真正に知覚していると考えるのが普通である。そのうえ、錯覚と真正な知覚は連続性があるので、もし幻覚的経験の側に置かれるとしたら、心から独立した世界の内容を知覚できないことになる。それゆえ、錯覚的経験を完全に主観的な幻覚的経験の側に置くことはできない。けれども、錯覚的経験を真正な知覚的経験の側に置いても問題は解決できない。なぜなら、心から独立した対象が持っている性質を直知していることが真正な知覚的経験において重要であるにもかかわらず、錯覚的経験は、知覚された対象が客観的には持っていない性質を持っているからである。この場合、「錯覚からの議論」は効力を持ったままである。そして、彼によれば、真正な知覚

の側をさらに二つに分けることによって、錯覚の問題は解決されない。なぜなら、錯覚に分類されるものは様々あり、それらを取り扱う唯一の方法はないからである。

Fishによれば、選言説が正しいとしても、それは比喻であるので、全ての場合がどちらかに当てはまるということを主張しているのではない。真正な知覚的経験と幻覚的経験の間は連続しているのである。間にあるような視覚的経験を扱うためには、真正な知覚的経験の説明と幻覚的経験の説明の両方のものが交じった説明が必要である。そして、真正な知覚的経験に近い錯覚的経験があれば、幻覚的経験に近い錯覚的経験もある。彼は、様々な錯覚を説明することによって、「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護しようとするのである。

4.2 錯覚のタイプ

そのためにまず、Fishは、錯覚の様々なタイプを分ける。一つ目のタイプは、テーブルやコインは異なる角度や異なる光の条件の下なら異なる形や色に見えるということのような物理的錯覚である。物理的錯覚は、多くの人が同じ時に同じ錯覚を見るという意味で間主観的であり、どのような状況でどのように見えるかを予言できる。そして、その場合、なぜそのように見えるかについての物理的説明がある。この場合、錯覚的な現れの理由は、世界の側にある。

次にFishが挙げているのは、視覚的錯覚、錯視である。たとえば、二本の同じ長さの線が両端にどんな印を書くかで長さが違って見えるというミュラーリヤーの錯覚などがその例である。それは、物理的錯覚と同様に、間主観的であり、予言ができ、世界がある仕方で存在することが錯覚の理由になっている。しかし、それらは物理的錯覚とは違い、たいてい我々の知覚的処理のメカニズムを騙すように作られており、説明は特定の組み合わせにアピールすることによってなされる。視覚的錯覚の場合、物理的錯覚の場合と同様に、物理的世界の特定の仕組みが重要である一方で、それだけでは十分ではないのである。

Fishによれば、そのほかにも認識的錯覚がある。それは、予言的で間主観的であるという特徴を欠く。たとえば、ロープを見ているのに、蛇がいるように見える錯覚である。

Fishは、以上のように錯覚のタイプを整理したうえで、それぞれのタイプの錯覚を、真正な知覚的経験の説明と幻覚的経験の説明の両方を使うことによって、センサーデータのようなものを持ち出すことなく説明しようと

するのである。

4.3 錯覚的経験の説明

Fishは、物理的錯覚の一つである色の錯覚の説明から始める。ここで考えられているのは、たとえば、赤い車を外灯のもとで見たらオレンジ色に見えるというような錯覚である。彼は、このような場合の物理的錯覚を真正な知覚の特別な場合として扱おうとする。先に見たように、「錯覚からの議論」によれば、常識は、我々が物理的世界に直接気づいているというテーゼと、錯覚が可能であるというテーゼの二つのテーゼを認めているが、その二つのテーゼは矛盾し、後者は否定できないので前者が否定されなければならない。しかし、彼によれば、ここで前者のテーゼを否定する必要はない。物理的錯覚に関して素朴实在論を擁護するために、矛盾を受け入れ錯覚が可能であるという後者のテーゼを拒否する方策や、両方のテーゼを受け入れそれらがなぜ矛盾しないかを示す方策を採用することができる。

前者の方法は、たとえば、Armstrong²²のように、対象は明かりの状態が変化するなら色を変えようとするものである。ある状況で特定のものが示す特定の色は、その表面の本質的な性質だけでなく、周りの状態についての事実にも依存していると考えるのである。もし、このような色についての関係的見解を採用するならば、形の経験が錯覚の場合も残っていることを説明できる。錯覚的な色の経験は、真正な知覚的経験の特別な場合であるから、我々は対象の形を見ていると言えるのである。また、連続性の問題も解決できる。主体の経験は錯覚的経験から真正な経験に変わるのではなく、一日の中で色が変化したとしても、色の経験は真正な経験のままなのである。

しかし、Fishによれば、このような考えに対しては二つの反論が考えられる。一つ目は、我々は状況が変わっても、色が変わるとは考えていないというものである。二つ目は、錯覚の可能性を否定するのはおかしいとするものである。これらの反論への返答は、両方のテーゼを受け入れなぜそれらが矛盾しないかを示すという解決の仕方を示すことになる。

Fishは、一つ目の反論に対しては、色についての日常の非関係主義的な考えを認めたくえて、関係主義も維持できると言う。特定の色と、その色の特定の陰 (shade) は同じではない。それは、特定の状況である対象が持っている重さは関係的性質である一方で、それは、対象の非関係的な質量とその置かれている状況の事実依存していると考えられると似ている。そのことは、二つ目の反

論に対する返答を示すことになる。なぜなら、色と陰を区別し、色を非関係の性質、陰を関係の性質と考えるならば、錯覚の可能性もなくなるからである。ある対象が示す陰がその対象の色に対応するスペクトルの範囲に入っている状況の場合、我々は対象の色を真正に知覚しているのであり、その示す陰がスペクトルの範囲の外にあるなら、それを間違っていると知覚していると言えるのである。そして、彼によれば、そのように考えるならば連続性の問題に対しても答えることができる。対象の陰は、その対象の色に対応するスペクトルの範囲から次第に動いていき、この過程の両端に真正な知覚とはっきりとした錯覚があるのである。連続性があるからといって、真正な知覚が現実との知覚的接触を失うと考える必要はないのである。そして、彼は、形の物理的錯覚の場合にも、色と同様に扱えると言うのである。

そのように、色や形という物理的錯覚に関して説明した後で、次に、Fishは、レンズを使うことによって生じる物理的錯覚を扱う。その例として彼が挙げているのは次のようなもの²³である。横一列に5個の丸がある。まず、最初に、その真ん中の丸を、覆いで縁取られた丸いレンズ（平らで、対象の丸よりも少し大きい）を通して見る。その場合、見られている場所は真ん中の丸とその周り少しだけである。次にレンズを少しゆがんだ同じ大きさのものにする。その場合、形は少し楕円に見えるが、真ん中の丸だけでなく左右の丸の半分ぐらまで見られる。それからさらにレンズをひどくゆがんだ同じ大きさのものにする。その場合、形はかなり細長い楕円に見えるが、見られている場所はほぼ5個の丸をカバーしている。彼によれば、その錯覚がなぜ生じるかの説明は、対象から反射される光を異なるレンズがどのように屈折させるのかの説明を超える必要はない。しかし、この場合には先の色や形の場合とは違った困難がある。それは、ゆがんだレンズを通して対象を見ているときに見られているものは対象ではなくレンズ上のイメージであり、平らなレンズの場合も見られているのはイメージではないかという問題である。

Fishは、この問題を考える際に、レンズの作用の重要な点を確認しておく必要があると言う。たとえば、顕微鏡レンズを通して血を見ると、レンズなしに知り得ていた事実気づけなくなるという代償を払って、顕微鏡レンズを通さずには見ることができなかつた、血の構成要素の形等についての新しい事実気づくことができるのである。レンズを通して新しい事実気づいているとき、以前気づいていた事実気づくことは阻害されている。

そのことを確認したうえで、Fishは、先の三つの経験の違いをレンズ上のイメージという考えを使わずに説明する。彼によれば、この場合違っているのはレンズによって見られている部分の大きさである。レンズがゆがむに連れ、レンズを通して見られている場所は広くなる。それは、先の顕微鏡の場合と似ている。大きくゆがんだレンズを通して見ることによって、主体は以前には気づくことができなかった事実気づくことができるが、主体が、他の事実、たとえば、対象の形についての事実気づくことは阻害される。そのように、これらの経験の現象的特徴の違いは、主体が直知している事実の違いによって説明されるのである。説明のために、レンズ上のイメージという考えを使う必要はない。

Fishが次に説明するのは、認識的錯覚である。彼は、例として、蛇を嫌いな人が、丸太のそばの丸まっているロープを見て蛇と間違える場合を考える。このような認識的錯覚の場合、蛇が丸太の下にいるという事実がないところで、丸太の下に蛇がいるという経験を持っているということが問題である。

Fishによれば、認識的錯覚の場合でも、主体は、対象が茶色であることなどを直知している。そして、後で錯覚であったと気づく場合には、ロープであるということを知るようになるのである。彼によれば、主体が事実を見るためには、その事実を見るための概念把握能力を持たなければならない。そして、概念把握能力がどう配置されるかは、主体が直面する環境の本質や配置と、主体のその人特有の心的歴史によって決定される。例であげたような認識的錯覚の場合、ロープの概念把握能力を配置すべき場所に、蛇の概念把握能力を間違えて配置しているのである。認識的錯覚の場合、主体は、真正な知覚の場合と同じ事実の集合を知っているが、能力を間違えて使って偽なる信念を形成している。この偽なる信念の形成ということによって、幻覚の場合と同様に、ロープを蛇だと思っている人の言動を説明することができる。そして、認識的錯覚と幻覚の場合の違いは、前者の場合は知覚に成功しているところもあるということと、前者の場合は間違いの説明のために主体の心的な構成と主体が直面している環境の本質と配置の特徴の両方が必要だが、後者の場合は環境の本質と配置の特徴が必要ないということの二つである。

Fishは、最後に視覚的錯覚について論じる。先に見たように、彼によれば、視覚的錯覚は、間主観的で予言的であり、視覚的錯覚が生じるためには世界の側がどのようなかが重要であるという意味で、物理的錯覚と同じだが、物理的錯覚とは違って、世界の側だけでは錯覚

的現れを説明できない。視覚的錯覚が世界の側の我々の知覚的過程に対して持つ影響を考慮しなければならないという、この視覚的錯覚の特徴は、認識的錯覚の場合と似ている。視覚的錯覚の場合、我々の知覚的メカニズムが間違っ導かれているのであり、不適切な概念把握能力のために、関係する事実を直知することに失敗しているのである。しかし、視覚的錯覚と認識的錯覚には違いがある。認識的錯覚の場合、主体の側と環境の側の二つの要素のうち、主体の側の要素が継続的でないため、それは、主観的で非予言的である。また、環境側の要素も継続的ではない。それに対して、視覚的錯覚の場合、同じく二つの要素を認めているにもかかわらず、環境側がどのような配置ならばどのような錯覚を引き起こすのかを示す標準的な配置があるし、主体の側も非予言的ではない。

以上のように、Fishは、選言説の枠組みの中で、錯覚が真正な知覚か幻覚のどちらかに当てはまると考えるという方法ではなく、真正な知覚的経験を説明する仕方と幻覚的経験を説明する仕方の両方を使って様々なタイプの錯覚的経験を説明することによって、錯覚的経験と真正な知覚的経験によって共有される心的状態を想定することなく、「錯覚からの議論」から素朴実在論を擁護するのである。

5. 「錯覚からの議論」に対するSmithの直接実在論擁護

5.1 どのような方策が不適切か

Smithによれば、「錯覚からの議論」から彼の言う直接実在論を擁護するためには、第三章で見た、彼の「錯覚からの議論」の整理のどの段階かの主張が不適切だと示さなければならない。彼によれば、錯覚の存在を否定するのはばかげているので、第一の段階では反論されない。しかし、「錯覚からの議論」の最終段階以前の段階が受け入れられるなら、最終段階でも反論されない。なぜなら、真正な知覚と同じものに気づいている、つまり、真正な知覚的経験と錯覚的経験は連続しているというのが、錯覚の本質だからである。また、それは第三の段階で反論されることもできない。たとえば、錯覚においても我々が気づいているのは物理的対象であると考えることによって、第三の段階に反論されることはできない。なぜなら、たとえ水の中で曲がって見える棒のような物理的基礎を持つ錯覚に関して純粹に物理的な特徴だとしても、ステレオグラムのような主観的な錯覚があるからである。それゆえ、彼によれば、それは第二の段階

で反論されなければならない。そして、彼によれば、第二の段階に反論するためには、「いかなるセンスデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」²⁴と「センスデータ推論がかなり単純な間違いを含んでいることを示すこと」²⁵の二つの方策が考えられるのである。

しかし、Smithによれば、後者はうまく行かない。たとえば、後者の代表的な方策は、「思われる」は「現実にある」という推定を含まないということによってセンスデータ推論の偽を示そうとするものであるが、「錯覚からの議論」の唱導者は、「思われる」から「である」を推論してはいない。そうではなく、彼らは、たとえば白い壁が黄色く見える場合、なぜ黄色く見えるのかの説明をするために、センスデータを導入しているのである。

センスデータ推論が単純な間違い含むことを示そうとする他の方策は、錯覚的知覚的経験の感覚的特徴を、センスデータの導入によってではなく、感覚質の志向的現れによって説明しようとするものである。白い壁が黄色く見えるとき黄色は単に表象されたものとしてのみあるというのである。その考えによれば、ユニコーンの絵は絵の具で覆われているがユニコーンは絵の具で覆われていないように、対象の表象の性質と表象された対象の性質は異なる。Smithによれば、このようなアプローチには、「分かれた征服的方策」と「統一の方策」の二つのやり方があるが、しかし、それらは、どちらもうまく行かない。「分かれた征服的方策」は、真正な知覚についてはいわゆる素朴実在論を擁護し、錯覚の場合を意識の中の感覚質の単なる志向的現れによって説明しようとするものである。けれども、錯覚は、たとえば色を間違えても形は間違えていないように、典型的には部分的であるので、形は現実に現れ、色は単に志向的に現れているというのはおかしい。真正な知覚も錯覚も、感覚質の志向的現れで説明できると考える「統一の方策」もうまく行かない。この場合は、意識主体に帰せられるのは、思想、信念、傾向性、表象だけであると考えられているので、感覚的特徴を正當に判断することができなくなるのである。

それゆえ、Smithは、「いかなるセンスデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」というもう一つの方策を検討する。真正な知覚と錯覚において同じ感覚質が現れているということ認めたとえで、そのような質を、センスデータを特徴付けるものとしてではなく、「流れとしての経験」を本質的に特徴付けるものとして理解することができるような知覚の分析を示すことによって、「錯覚からの議論」に反論しようとするのである。

Smithによれば、そのためには、「知覚していること」

と「単に感覚 (sensation) を持つこと」を区別することが必要である。直接实在論を擁護するためにはセンスデータ説や因果説はここでは使えない。そのため、区別を説明する有力な候補は、「単に感覚を持つこと」を知覚的なものにする要素、たとえば、思想や概念があると考える二重構成説になる。

しかし、Smithによれば、二重構成説には、問題がある。一つ目は、知覚的判断が単なる感覚から派生する場合、たとえば、頭痛が「私の母がいる」という信念を私に引き起こす場合があるということである。それは、「感覚を持つこと」は概念化を伴わないとすることと矛盾する。二つ目は、その理論は、錯覚的経験と真正な知覚的経験を区別できないというものである。我々は何らかのものを真正に見ているときでさえ偽の信念を形成することがある。それは判断の間違いであり錯覚ではない。一方、正しい知覚的判断をしているが、間違っただけで知覚しているのだから、間違っただけで知覚している場合もある。たとえば、白いボールが緑のボールを打っているが、だますような光のもとで、白いボールが黄色いボールを打っているように見えている場合も考えられる。これらの両方の場合を考えるなら、何らかの判断をする前に錯覚と真正な知覚の区別を知る必要があるが、二重構成理論では、単なる感覚のレベルでは、認識をすることができないのである。三つ目は、二重構成説が直接实在論になるためには、感覚が気づきの対象として機能しないということが示さなければならないが、それは示されていないというものである。四つ目は、二重構成説は矛盾しているというものである。ある音がトランペットの音だと判断できるのは、その音を知覚的に既に直知しているときだけであるが、しかし、二重構成説によれば、知覚を構成する判断に先立って、物理的対象を直知することはないのである。そして、彼によれば、以上のような二重構成説に関する問題は、全て、知覚が判断を含むものとして、感覚がそれを含まないものとして、それらを極端に分けることから生じているのである。

しかし、知覚と感覚を同一のものとして扱おうとする方策も、知覚における概念化に本質的な役割を与えている限り不適切である。Smithによれば、知覚における概念化に本質的な役割を与えることは、感覚的狀態を知覚にするものとは無関係なのである。

Smithによれば、概念化について「高度な」説明をするなら、つまり、概念化をかなり洗練されたもの（自己言及的で言語的なもの）と捉えるなら、概念を欠くにもかかわらず知覚できる生物（たとえば犬）がいるという

ことが、概念は知覚と無関係であるということを示している。幼児や動物が言語と似ているものを使用しているから、彼らは知覚しているのだということも解決にはならない。子どもや動物に知覚を帰することは、彼らが言語と似たものを使っていると見なすことに依存しない。

そこで、概念化を洗練されたものと考えをやめて概念化についての「低い」説明をしても、問題の解決にはならない。我々はある状況で二つの色を区別できたとしても、後になって一方を見せられたときそれがどちらの色か理解できない場合があるので、概念をもつことが区別する能力と同じだとは考えられない。概念を持つことを、理解力を持つこと、対象を分類できることと捉えても問題は解決されない。なぜなら、知覚が本質的に理解力の実行を含んでいることも偽であるからである。何らかのものを知覚するが、それを分類することに失敗することがあり得る。「それは何ですか」という質問が意味を持ちうるとしたら、知覚している全てのものを理解していなければならないわけではない。また、「として見る」ということは、「として理解する」ということを含んでいない。あるものがあるものより小さく見えると言うためには概念は要求されない。様々な現れを一つの対象の現れとして見るためには、それらを結びつけている概念が必要だから知覚には概念が必要だという考えもうまく行かない。なぜなら、それが真だとしても、それは知覚が客観的だと主張しているだけであり、どうして客観的なのか述べられていないからである。

5.2 望まれる知覚についての説明

Smithは、「錯覚からの議論」から直接实在論を擁護するためには知覚をどのように分析してはならないかを論じた後で、どのように分析しなければならないかを論じる。彼によれば、望まれる知覚の説明は、志向的であり世界に向けられているという特徴を正当に判断でき、物理的世界との直接的知覚的接触の可能性を、概念化によって説明するのでもないような説明である。ここでは、何が「知覚していること」を「単に感覚を持つこと」から分けるのかが問題になる。

Smithによれば、第一に考えられるのは、現象的三次元的空間性である。感覚器官に関して気づきの対象が現象的三次元的に置かれているという意味での「空間性」が、大部分の知覚の対象の知覚の本質的な特徴である。空間的に、向こう側に対峙してあるということ (over-againstness) が重要である。たとえば、向うに置かれて

いるボールは、それを見ている目からは空間的に分けられる。一つのものについて異なる視点が可能なら、我々は単に感覚を持っているのではなく、知覚している。

しかし、それだけでは十分ではない。なぜなら、たとえば、匂いは空間的でないように思われるのに、それらは知覚されていると言われるからである。匂いは、典型的には、離れたところではなく、鼻の中で経験される。その場合重要なのは、主体がそれに気づいているような、知覚された対象に関する感覚器官の動きである。変化が自分の動きの結果生じているということが重要である。Smithによれば、匂いは、空間的に置かれることはできないが、我々の身体をそれらに関係して動かすことができ、対象に対して異なる視点を持つことができるので、単なる感覚ではなく知覚なのである。しかし、現象的三次元的空間性は必ずしも自己運動を必要としない。我々は意識的な動きに関する限り完全に麻痺している一方で、視覚的に世界を見ることは可能である。それゆえ、知覚において、現象的三次元的空間性と自己運動という二つの異なる現象を認めなければならない。

けれども、今まで述べてきたものだけでは、知覚を説明するためには十分ではない。触覚の場合、現象的三次元的空間性も自己運動もない。Smithによれば、その場合知覚的経験であることを示しているのは、「つまずき」(Anstoss)である。「つまずき」とは、感覚的表面への単なる圧力ではなく、外側にある対象によって我々の能動的な身体的動作が妨げられているのを感じるという現象である。それは、自己運動という特徴にも現象的三次元的空間性という特徴にも組み込まれることができない。

以上のように、Smithによれば、知覚的意識には、単なる感覚と共有されていないという意味で非感覚的(non-sensuous)だが、概念化を必要としていないという意味で非概念的(non-conceptual)な特徴を持つ三つの源があるのである。

5.3 錯覚的経験の説明

次の問題は、前節で述べた三つの基本的な特徴で、どのようにして錯覚の議論に答えることができるかである。

Smithは、まず、「錯覚からの議論」は「つまずき」には当てはまらないと主張する。なぜなら、「つまずき」の場合、我々が知覚しているとき気づいているものは感覚ではなく、我々は外的な物理的力を直接経験しているからである。たとえば、自分の能動的な動きへの抵抗を間違っ

て現実よりも大きいと考えるような「つまずき」の錯覚の場合、かかっている物理的な力は同じなのに異なるように感じられるのは我々の側の変化のせいである。たとえば、筋肉が疲れているとき与えられた抵抗は、現実より大きく感じられる。彼は次のように言っている。「任意の対象は我々の活動に対する相互作用としてのみ知覚されるので、この領域における錯覚を説明するために受動的に受け取られた感覚を導入する必要はない。なぜなら、外的な力がどのように知覚されるかは、外的な力を示している抵抗という特徴によって条件付けられているから。」²⁶

次に、Smithは、現象的三次元的空間性と運動の構造について考察する。彼によれば、それらは一緒になって知覚的安定性を示す。ここでの問題も、知覚には知覚的安定性があるということが、知覚しているときに気づいているものは単なる感覚ではなく、普通の物理的对象であるということを示すことができるかということである。彼によれば、知覚的安定性とは、知覚的状况における変化にもかかわらず、主体に現れるものとしての対象における安定性のことである。たとえば、ある対象に近づいていくとそれはだんだん大きく見えるようになるが、我々は、大きさは変化しないと考える。このような知覚的安定性は、経験の変化と、経験の対象における変化の経験を区別している。単に感覚を持っているだけでは、その区別はできない。それゆえ、知覚しているときに気づいているものは、対象であって、単なる感覚ではないのである。

以上のように、Smithによれば、「つまずき」の場合も知覚的安定性の場合も、その錯覚を説明するために、受動的に受け取られた感覚を導入する必要はない。そして、「錯覚からの議論」では、知覚において我々が気づいているのは、普通の物理的对象か、センスデータ、もしくは、感覚のどちらかであるので、知覚において我々が気づいているのは、普通の物理的对象であるということになり、「錯覚からの議論」から直接实在論を擁護できる。

6. 考察

本論文で論じたいのは、選言説の立場で「錯覚からの議論」に答えることの適切性についてである。そのために、第四章と第五章で、Fishによる選言説の立場からの「錯覚からの議論」への返答と、Smithによる別の立場からの「錯覚からの議論」への返答を見てきた。本章では、まず、第一に、第三章で述べたSmithによる「錯覚からの議論」の定式化のそれぞれの段階に対応する「錯覚か

らの議論」に反論する方策のうち、「いかなるセンスデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」で第二の段階に反論しようとする方策以外の方策の不適切性を示すためにSmithが挙げた、第五章で見たような根拠では、Fishの考えが不適切だと示すことにはならないということを論じる。次に、Fishの考えが、Smithが錯覚的経験の説明に必要な知覚の分析の際に求められると言っている条件をかなり満たしていることを論じる。それから、Smithの条件の中でFishの考えが満たしていないものがあるということが、Fish議論において問題にならず、逆に、そのことは、Smithの考えにははっきりしない点があるということを示していると論じる。そして、それらを総合して、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴実在論を擁護する方策は、かなり見込みがあるのではないかとこのことを結論づけたい。

そのためにまず、さまざまな方策の不適切性を示すためにSmithが挙げた根拠を確認しておく必要がある。一つ目は、第三章で述べたSmithによる「錯覚からの議論」の定式化の第一の段階に反論しようとする方策の不適切性を示すために挙げられた根拠である。それは、第五章で見たように、我々の錯覚の可能性があることを否定するような方策は不適切だということであった。二つ目は、第三章で述べたSmithによる「錯覚からの議論」の定式化の最終段階以前の段階を受け入れたうえで、最終段階で反論しようとする方策の不適切性を示すために挙げられた根拠である。それは、第五章で見たように、真正な知覚的経験と錯覚的経験は連続しているから、その連続性を認めないような方策は不適切だということであった。三つ目は、第三章で述べたSmithによる「錯覚からの議論」の定式化の第三の段階に、錯覚においても我々が気づいているのは物理的対象であると言うことにより反論しようとする方策の不適正を示すために挙げられた根拠である。それは、第五章で見たように、主観的な錯覚を認めないような方策は不適切だということであった。四つ目は、第三章で述べたSmithによる「錯覚からの議論」の定式化の第二の段階に、「センスデータ推論がかなり単純な間違いを含んでいることを示すこと」によって反論しようとする方策のうち、「思われる」という語の適切な理解によってセンスデータ推論が単純な間違いを含んでいると示すことができるという考えに対する批判としてなされたものであった。第五章で見たように、Smithによれば、センスデータ推論は、「思われる」から「ある」への推論はしていない。そうではなく、たとえば、黄色い壁を見ているときと黄色く見える壁を見ているときとで経験が質的に同一であるというこ

とを説明するために、感覚質を導入している。それゆえ、その質的同一性を説明できないような方策は不適切だったのである。五つ目は、第三章で述べたSmithによる「錯覚からの議論」の定式化の第二の段階に、「センスデータ推論がかなり単純な間違いを含んでいることを示すこと」によって反論しようとする方策のうち、意識への感覚質の志向的現れで錯覚の場合の感覚的特徴を説明することによって、センスデータ推論の単純な間違いを示そうとする方策に対する批判としてなされたものであった。第五章で見たように、その方策は、錯覚と真正な知覚を区別しようとするならば錯覚が典型的には部分的であるということと矛盾するし、区別しないならば感覚的特徴を正当に判断することができないので、不適切だったのである。

次に、Smithが錯覚的経験の説明に必要な知覚の分析の際に求められると言っている条件も確認しておかなければならない。彼が目指していたのは、「いかなるセンスデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」だった。そのために必要とされていた一つ目の条件は、真正な知覚と錯覚において同じ感覚質が現れているということ認めるということであった。そして、二つ目の条件は、第一の条件で言われたような感覚質を、センスデータを特徴づけるものとし、知覚の分析がなされなければならないということであった。それから、三つ目の条件は、「知覚していること」が「単に感覚を持っていること」と区別されなければならないと、それらが区別されるのは、前者が志向的であり世界に向けられているという特徴を持っているからであるので、その志向的であるという特徴を正当に判断できるような知覚の分析がなされなければならないということであった。四つ目の条件は、三つ目の条件を満たすために、二重構成説、つまり、知覚は概念化を伴い感覚は概念化を伴わないとする考えを採用してはならないということであった。そして、その条件は、知覚の志向的特徴を説明するために、概念を持ちだしてきてはならないということにも広げられた。たとえば、二重性を捨てたとしても、知覚的意識の志向的特徴を説明するために概念を持ち出すことは、問題の解決にはならないと言うのであった。

以上のように整理したうえで、最初に、Smithが、「錯覚からの議論」に反対する「いかなるセンスデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」以外の方策が不適切だと言うために挙げた根拠で、Fishの考えに反論できるかを見てみたい。

まず、一つ目については問題にならない。なぜなら、「錯覚からの議論」に反対するFishの議論も錯覚が存在

することを認めているからである。

次に、二つ目についてである。ここで問題になるのは、Fishの議論が、真正な知覚的経験と錯覚的経験の連続性を説明できるかどうかということである。しかし、この点に関しても問題はない。先に見たように、Fishは、錯覚的経験は真正な知覚的経験と連続性があるので、錯覚的経験に対して、幻覚的経験に対するのと同じ説明を与えることができないということを認めていた。そして、真正な知覚的経験の説明と幻覚的経験の説明の両方を使うことによって、様々な錯覚的経験について個別に説明していたのである。たとえば、色の物理的錯覚に関して、彼は、対象の陰はその対象の色に対応するスペクトルの範囲から次第に動いて行き、この過程の両端に真正な知覚とはっきりとした錯覚があると考えることにより、真正な知覚的経験と錯覚的経験の連続性を説明していたのである。

三つ目の主観的な錯覚を認めないような説明は不適切だということも、Fishの場合は当てはまらない。なぜなら、彼は、テーブルが異なる光の条件の下では異なる色に見えるというような物理的錯覚以外にも視覚的錯覚や認識的錯覚を認めていたからである。Smithが主観的錯覚の例としてステレオグラムを挙げていたことを考えるならば、彼の考える主観的錯覚は、物理的世界の特定の仕組みだけでなく世界の側の我々の知覚的過程に対して持つ影響も考慮されなければならない錯覚、Fishの言い方で言うならば、視覚的錯覚であると考えられる。そして、それもFishは説明していたのである。

四つ目に関しては、真正な知覚的経験と錯覚的経験が質的に同一であることを説明できるかが問題になる。しかし、もし同一であるということと区別不可能であるということと理解するならば、それは、Fishにとっては問題にならない。なぜなら、選言説が目指しているものは、認識の主体が黄色い壁を見ている経験と黄色い壁を見ているように見える経験が区別不可能であるということ、それらが同じものを共有しているということではない方法で、説明しようとするものだからである。

五つ目に関しても、真正な知覚的経験と錯覚的経験の区別不可能性を説明するために、Fishは感覚質の志向的現れを使っただけではないので、彼の場合は問題にならない。

以上のように、Smithが、「錯覚からの議論」に反対する「いかなるセンスデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」以外の方策が不適切だと言うために挙げた根拠では、Fishの考えが不適切だと示すことはできない。

次の問題は、Smithが錯覚的経験を説明するために必要な知覚の分析にとって求められると言っている条件を、Fishの考えが満たしているかどうかである。

一つ目の条件は、真正な知覚と錯覚において同じ感覚質が現れているということを認めるということであった。しかし、ここにおいて「同じ感覚質が現れている」ということを、真正な知覚的経験と錯覚的経験が区別できないということと同じだと考えるならば、先にも見たように、Fishの考えはそれを否定するものではない。

二つ目の条件は、求められる知覚の分析はセンスデータを含んでいてはならないというものであった。Fishの考えは、この条件も満たしている。彼は、認識の主体が黄色い壁を見ている経験と黄色い壁を見ているように見える経験を区別できない場合があることを認めたとはいえ、真正な知覚的経験と錯覚的経験が共有するセンスデータのようなものを認めることなく、その区別不可能性を説明しようとしているものである。

三つ目の条件は、知覚が世界に向けられているという特徴を正当に判断できるような知覚の分析が必要だということであった。Fishの考えは、この条件も満たしている。第四章で見たように、彼は、「経験が主体に関係させる事実の特定の配置は、したがって、経験自体の現象的特徴は、環境にある対象と性質の分布、その環境における主体の場所や視点、視覚一般の本質と主体の視覚体系の特異性、主体の注意力の現在の分布、主体の概念的力によって決定される」²⁷とすることにより、真正な知覚的経験の一つである真正な視覚的経験が世界に向けられているという特徴を持っていることを説明していた。ここでは、主体の概念的力が重要な役割を果たしている。そして、この点をどう考えるかが四つ目の条件が満たされているかどうかと関係している。

Smithによる四つ目の条件は、知覚の志向的特徴を説明するために概念を持ち出してはならないということであった。Fishの考えはこの条件を満たしていない。先に見たように、彼は知覚の志向的特徴を説明するために、主体の概念的力を持ち出していたからである。

以上のように、知覚の志向的特徴を説明するために概念を持ち出してはならないという四つ目の条件以外は、Smithが知覚の分析にとって必要だと言っている条件を、Fishの考えは満たしている。したがって、次の問題は、主体の概念的力を持ち出すことが、知覚の分析に関して、ひいては、「錯覚からの議論」から素朴実在論を擁護することに関して問題になるかどうかということである。

まず、主体の概念的力でFishが何を考えていたかを

確認しておきたい。第四章で見たように、彼によれば、それは、維持され増加する情報に基づいて自分の行動の着手や制御ができ、環境についての情報を入手・維持でき、情報を解釈でき、その状況に接近でき、維持され増加する情報に基づいていくつかの行為から行為を選択でき、目的を持つことができるということであった。

では、このように概念的力を考えた場合、それを認めることは問題になるのだろうか。Fishの場合、知覚的経験と単に感覚を持つことを、概念化を基準に厳密に二つのものとして分けているわけではないので、Smithが言っているような二重構成説の二重性は問題にならない。もしFishの考えで問題があるとしたら、それは、概念化自体の問題になる。

Smithは、概念化についての高度な説明と低い説明を分けていた。前者は、概念化をかなり洗練された、自己言及的で言語的なものと捉える考えであり、後者は、それを弱めたものである。そして、彼によれば、高度な説明は、動物や幼児のような、概念を欠くにもかかわらず知覚できる生物がいるということで、反論されるのであった。しかし、Fishは、概念的力を説明する際に、自己言及性や言語的であることを使っていない。彼は、言語能力に言及することも、自己について反省できるということに言及することもなしに概念的力を説明している。たとえば、犬でも環境についての情報を入手し、それを解釈し、行為を選択することができるだろう。犬から少し離れたところに餌があったら、その餌に近づいて行って食べるだろう。

では、弱められた概念化の説明についてはどうだろうか。Smithは、概念を持つことを区別する能力と同じだと考えるような概念主義は、確かに認められるが、それでは素朴实在論を維持することができないと言う。しかし、Fishは概念的力についてそのようなことを考えているのではないので、その反論は当てはまらない。

また、Smithは、弱められた概念化の説明の中で注目しているのは、概念を持つことを、理解力を持つこと、対象を分類できることという意味で捉えることだとしてうえて、しかし、たとえば、何らかのものを知覚していても、それを分類することに失敗することがあり得るので、それでも問題は解決されないとしていた。「それは何ですか」という質問が成り立つということは、知覚と理解が同じではないことを示しているというのであった。しかし、Fishの概念的力の説明は、そのような意味での理解力と同じものであるとは考えられない。彼の概念的力の説明は、外に現れた行動で確かめることができるものなのである。

そして、ここでもしFishの概念的力の説明も批判されるべき概念主義だと見なすとしたら、Smithが志向性を説明するために持ち出している現象的三次元性や自己運動、「つまずき」も、我々の概念の一種ではないのだろうか。Smithはあるものがあるものより小さく見えると言うためには概念は要求されないとしているが、より小さく見えるというのは概念ではないのだろうか。これらがなぜ概念化と捉えられるべきでないのかの説明はなされていない。もしSmithが、そのような状況で、現象的三次元性や自己運動、「つまずき」を使って知覚の分析をし、そのような知覚の分析に基づいて、錯覚的経験を説明することに問題がないとしたら、Fishの説明にも問題はないように思えるのである。

以上のように、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護する議論の一つであるFishの考えと、選言説以外の立場から「錯覚からの議論」に答えようとする議論の一つであるSmithの考えは、「いかなるセンサーデータも含まない詳細な知覚の分析を示すこと」を通して素朴实在論を「錯覚からの議論」から擁護するという共通点を持っている。そして、Fishの考えは、Smithが自分以外の方策に対して提出している批判のほとんどを避けることができる。そのうえ、唯一問題となるFishの考えに見られる概念を重要視する姿勢は、Smithの概念主義批判によって排除されるものではない。一方、現象的三次元性や自己運動、「つまずき」を使ったSmithの知覚の分析に関しては、それらの特徴がなぜ概念でないかが明らかではない。そのような点を考えあわせるならば、少なくとも、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護している議論が、その目的のために不適切だとは言えない。

7. おわりに

本論文では、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護する議論の適切性について検討してきた。そのために、第二章では、本論文では素朴实在論をどのように理解するかを示し、第三章では、「錯覚からの議論」がどのようなものかを確認した。それから、第四章と第五章で、Fishによる選言説の立場からの「錯覚からの議論」への返答と、Smithによる別の立場からの「錯覚からの議論」への返答を整理した。そして、第六章では、Fishの考えとSmithの考えを考察することによって、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護することが様々な批判に耐えるものであり不適切なものではないということを論じた。確かに、こ

こでの論は Fish と Smith の考えに焦点を当てているが、Fish の議論は、知覚の中間物を考えず、知覚的誤りを基本的には選言によって扱おうとしている点で、選言説の重要な特徴を満たしているので、本論文での議論は、選言説の立場で「錯覚からの議論」から素朴实在論を擁護する方策一般にも広げられると考える。もちろん、積極的な理由で選言説が適切だと言うためには本論文での議論は弱い。それは、今後の課題である。

注

- 1 「気づく」は、「対象の存在や状態を知る」という意味で使われている。
- 2 Ayer, A. J. *The Problem of Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1956. (Ayer, A. J. (神野慧一郎訳) 知識の哲学. 東京, 白水社, 1981.), Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.)
- 3 Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.
- 4 Fish の考えについては, Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009. を参照して整理する。ここでは特に視覚的錯覚が問題にされている。Fish は、ニュージーランド Massey 大学で哲学を教えている。心の哲学に関心を持ち、選言説について多く論じている。
- 5 Smith の考えについては, Smith, A. D. *The Problem of Perception*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 2002. を参照して整理する。Smith はイングランド Warwick 大学で知覚、心の哲学、形而上学等を研究している哲学者である。
- 6 選言説を使って幻覚からの議論から素朴实在論を守るという問題に関して、私は、「選言主義における否定的認識論について」(横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. 図書館情報メディア研究. vol.7, no.2, 2009, p.19-32.) で、選言説が幻覚をどのように説明できるのかに関する Martin 流の否定的認識論 (negative epistemics: 幻覚的経験は、真正な知覚的経験から反省的に区別不可能な状態であること以外の何ものでもなく、積極的な特徴 (肯定的特徴) を持たないと考える立場) の意義と問題点について論じた。また、「選言主義、幻覚、区別不可能性: Fish の提案」(横山幹子. 選言主義、幻覚、

- 区別不可能性: Fish の提案. 図書館情報メディア研究. vol.8, no.2, 2010, p.15-27.) では、選言説の立場から幻覚の存在が素朴实在論と矛盾しないと論じている Fish の考えを見た。本論文では、同じ知覚的誤りでも、幻覚とは異なった扱いが必要に思われる錯覚について、考察したい。なお、私はこれまで、Disjunctivism に対する訳語として「選言主義」を使ってきたが、「選言説」と訳されることが多いため、本論文では、選言説という言葉を使っている。
- 7 神野慧一郎. “知覚と实在”. 現代哲学のフロンティア. 神野慧一郎編. 勁草書房. 1990, p.38. 参照。
 - 8 Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 16.
 - 9 *Ibid.*
 - 10 *Ibid.*
 - 11 Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p. 22.
 - 12 Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 30.
 - 13 Snowdon, P. “How to Interpret ‘Direct Perception’”. Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p.68.
 - 14 Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 30.
 - 15 Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p. 23.
 - 16 *Ibid.* p. 25.
 - 17 *Ibid.*
 - 18 *Ibid.* p. 26.
 - 19 Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 75.
 - 20 Kirk, R. *Zombies and Consciousness*. Oxford, Oxford University Press, 2005, p. 89.
 - 21 Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p.94.
 - 22 Armstrong, D. M.A *Materialist Theory of the Mind*. London, Routledge, 1968.
 - 23 この例は Foster が挙げている例 (Foster, J. *The Nature of Perception*. Oxford, Oxford University Press, 2000, p. 67-68.) を Fish が変形したものである。
 - 24 Smith, A. D. *The Problem of Perception*. p.34.
 - 25 *Ibid.*
 - 26 *Ibid.* p.168-169.
 - 27 Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p.75.

参考文献

- Armstrong, D. M.A *Materialist Theory of the Mind*. London, Routledge, 1968.
- Ayer, A. J. *The Problem of Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1956. (Ayer, A. J. (神野慧一郎訳) 知識の哲学. 東京, 白水社, 1981.)

- Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.)
- Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992. London, Routledge, 2000.
- Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Haddock, A.; Macpherson, F. ed. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Oxford, Oxford University Press, 2008.
- Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.
- Kirk, R. *Zombies and Consciousness*. Oxford, Oxford University Press, 2005.
- Smith, A. D. *The Problem of Perception*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 2002.
- Snowdon, P. “How to Interpret ‘Direct Perception’”. Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p.48-78.
- 横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. 図書館情報メディア研究. vol.7, no.2, 2009, p.19-32.
- 横山幹子. 選言主義, 幻覚, 区別不可能性: Fishの提案. 図書館情報メディア研究. vol.8, no.2, 2010, p.15-27.

(平成 23 年 9 月 30 日受付)

(平成 24 年 2 月 7 日採録)